

海洋・海岸という言葉は、陸地・内陸という概念と対照的な響を持っている。われわれが先祖代々住みついてきたのは、まさしくこの大地であり、人間の造り出した都市や村落、耕地や牧場、工場や交通路など、およそ形のあるすべてのものは、陸地の表面に刻みつけられている。そしてこの陸地を取り巻く海洋は、茫洋と果てしなく広がる水の連続で、人間の創造物とはなんのかわりもないようにみえる。

事実、かつては海岸は「文化の果てるところ」であった。人間の活動領域は、内陸から海岸まで広がってきても、そこで尽きると考えられた。ただ、いくつかの限られた海洋民族のみが、ここを越えて海上へ進出し、漁業に、交易に、また新居住地の獲得につとめたのである。十五世紀に始まる大航海時代は、人間と海洋との関係に革命的な変化をもたらした。かつて陸と陸とを隔てた海は、いまや陸と陸とを結ぶ絆になった。世界各地の間の貿易や交通、文化や民族の交流、政治力の作用と反作用、それらは海洋を通して年ごとに強く盛んになっていく。そこに、多方面にわたる歴史地理の課題がある。とりわけ国土の四面に海をめぐるしたわが国においては、海洋の地理的な研究がもっと積極的であってよさそうに思われる。

しかし、海が重要な研究であるからといって、海洋と陸地とを、あれかこれかという二者択一的な形で問題にすることは、歴史地理的に適切な姿勢ではあるまい。この両者は一見すると全く別個な自然環境のようである。しかし、海洋の側には、大陸棚の海底地形や沿岸漁場のように、直接陸地の作用を受けつつ形成されるものがある。

り、他方では、陸地の気候や植生のように、海洋の諸条件の強い影響の下に置かれているものがある。そもそも海岸線自体が、あるいは河川や波浪の営力により、あるいは人工によって、ときには海の方へ、ときには陸の方へとその位置を移動させる。すでに自然的な側面においても以上のごとくであるが、まして人間のさまざまな活動にいたっては、陸から海に出ても、また必ずや陸に戻る。人間の営みの空間的な軌跡を歴史地理的に取り上げるときに、その海上の分だけを切り離して論じ難いことは明かであらう。

とくに海岸は、陸と海との相い接触する地帯である。海と最も深い関係を持つ陸上部分であるとともに、陸から海への出口に当たっている。広い海面における漁撈活動の基地は、海岸の漁港や漁村であり、海上交通や貿易の発着地、また海を支配する軍事力の拠点は、それぞれ商港であり、軍港である。さらに、輸入原材料に依存する重化学工業において、その工場立地は年とともに海岸への集中傾向を強めている。それゆえ、海岸の歴史地理的な研究においては、一方で海洋との諸関係を明かにするとともに、他方では周辺および内側の陸上地域との関連性を追求することが要請されるのである。

「海洋・海岸の歴史地理」というタイトルによって編集される本書が、地理学の広い分野から批判と教示とを受けることによって、海洋や海岸の研究が一層発展するように祈ってやまない。

一九七一年一月

山口 平四郎